

# 中国における先史集落及び初期都市研究のあゆみ ——考古地理学の角度から

## A Review of Studies on Prehistoric Settlements and Early Cities in China

王 妙 発

Miaofa WANG

### Abstract

This paper reviews the studies on prehistoric settlements and early cities in China. In spite of a long history of studies of Chinese history, studies on prehistoric settlements and early cities started as late as early 20th century when modern archaeology was introduced from the West. The first part of this paper reviews the studies on prehistoric settlements, pointing out that the studies mostly focus on the formation of settlements, and then on the archaeological culture of settlements. The second part of this paper reviews the studies of early cities, pointing out that the study interests include the origin and development of cities, the definition of city, the relations between walls and early cities, and the application of research methods of geography. This paper also introduces the author's own views on these two study topics.

中国大陸における先史時代の定住集落の形成から初期都市の成立に至る全過程は、言うまでもなく一つのきわめて大きな研究課題である。この課題に関する研究は歴史学、考古学、地理学、社会学、政治学、民族学、文明史など各分野に関わっており、研究に利用される資料は、主に考古学に関するもので、特に考古発掘・調査報告、あるいはそれに関連する研究論文である。筆者はこれらの先史集落及び初期都市に関する考古資料に基づいて、考古地理学の角度から出発し、この課題に対して研究を行う計画がある。拙稿はこの研究計画の一つのステップとして、これまでに発表されている先史集落及び初期都市に関する研究について考察を行いたい。もちろん、これも今までに発表されている関連の資料に制限されている内容についての検討であると言わざるを得ない。

考古地理学とは、考古学の資料を研究対象とし、歴史（先史）上の地理的現象を考察する、

新しい複合科目である。この科目は考古学と地理学の間に位置し、歴史地理学の一つの分野である。この学科は日本で誕生したもので、筆者はかつて中国の学界に日本の考古地理学の理論的研究の代表的な論文を紹介したことがある<sup>(1)</sup>。

## 一、先史集落研究の発展

中国における先史集落研究の発展を論じることはこの研究史を論じることになるが、中国の伝統的な「史」という概念からすれば、実はそれは「史」と言えないかもしれない。中国は歴史文献がきわめて豊富であるが、しかしほとんどは「歴史年代に入った（有史）」後の文献である。「先史」に関しては、たとえ文献に記載されていてもはっきりしないところが多く、伝説絡みなことばかりである。また、たとえ記載されているのが史実であっても、確証を得ることがとても困難である。周知のように、殷代の実在が証明されたのは、甲骨文の発見がなくてはならなかった。ましてや先史集落に関する記載に至っては、ないも同然と言っても過言ではないだろう。本来、「先史」とか「集落」とかの概念は近代歴史学及び地理学が成立することによって形成された概念であるが、それに関する文献の記載が偶然にもいくつか見出すことができる。そこから、私達は古代人の「集落」という概念に対する理解をすこし知ることができる。たとえば、『爾雅』に『邑』の外は郊と言ひ、『郊』の外は牧と言ひ、『牧』の外は野と言ひ、『野』の外は林と言ふ（「邑外謂之郊，郊外謂之牧，牧外謂之野，野外謂之林」）という言い方がある。これは人類の居住する集落の配置及び周辺環境との関係についての記述ではないかと考えられる。『爾雅』は前漢の初め頃に成立したのだが、更に古い年代の資料も含まれているはずである。このため、ここから先史時代の集落現象の影（姿）を若干見ることができると考えられる。例えば、近代的な考古発掘で多くの先史時代の集落が発見されている。その中の半坡遺跡<sup>(2)</sup>と姜寨遺跡<sup>(3)</sup>のような居住区、土器製造区（窯場）、墓地など秩序のある集落の配置は、すこしばかりが『爾雅』の記述に関連するのではないかと考えられる。しかしこの種の記録は少なすぎて、また雑然として、研究資料として利用することはできないであろう。この故に、拙稿の課題にとって、先史集落に関しては文献面での期待はできないと考えられる。その一方では、考古学の発展によって、考古発掘・調査で先史時代の集落遺跡が大量に発見され、関連する報告もかなり発表されている。まさにこのようなことがあってこそ、筆者の今の研究及び検討がはじめて可能になったのである。

中国の考古学自身の「歴史」はまだ長くない。従来の金石学を除いて、近代考古学の成立は20世紀に入った後の事である。その上、考古学者の関心は、長い間、主に各種の「器物」（道

(1) 筆者訳文「考古地理学之意義」（原作小野忠熙）、『歴史地理』第13輯、上海人民出版社1996年。

(2) 中国科学院考古研究所、西安半坡博物館編著『西安半坡』、文物出版社1963年9月。

(3) 西安半坡博物館、陝西省考古研究所、臨潼県博物館編『姜寨』（上、下冊）、文物出版社1988年10月。

具）および器物で表される「考古学文化」に、またはそれらの「文化」の変遷および関連する社会の構造・組織の変遷などの面に集中していた。地理学的意味の「集落」に関心を持ち、研究対象としたのはより遅くなってからのことである。しかし前世紀後半以来、考古発掘・調査で多くの先史集落の遺跡が発見され、発掘報告などの資料も蓄積され豊富になった。次第に一部の考古学者あるいは地理学者が「集落」そのものに興味を持ち、研究を行い始めたのである。

厳密に言うと、「集落」そのものに対して全面的な研究を行い始めたのは1950年代に入ってからのことである。西安にある半坡新石器時代の遺跡の大規模な発掘<sup>(4)</sup>は重要なきっかけとなったといえよう。一部分の学者はこの遺跡とその他の類する遺跡の集落形態に関心を持ち始め、先史集落と関連する様々な問題の研究も活発になり始めた。この経緯から、先史集落形態の「研究史」がないとは言いすぎたかも知れないが、歴史が比較的短く、関連する研究成果が多くないのは事実である。アメリカの考古学者張光直（K.C.Chang）はこの問題に比較的敏感で、八十年代の初め頃に次のように指摘した。中国の考古学について、「最も成果があげられそうな研究テーマの一つは集落形態である。これは歴史および先史年代のある時期における集落形態と、長い年代を経てからはじめて識別できる集落形態との両方を指す。」さらに、「資料は、すでにこのような研究を始めるのに十分である」とも言う<sup>(5)</sup>。確かに張氏に指摘された通り、ここ数十年、先史集落に関して関心を持ち始めた学者が多くなり、関連する論文も相当な量に達している。

しかし、考古学および歴史地理学の他課題の研究と比べると、先史集落形態といった課題の研究はやはり活発とは言えない。その上、研究者の注意は主にある一つの集落あるいはある種の現象に集中し、大きい地域を研究の対象とする例及び「長い年代を経てからはじめて識別できる集落形態」を研究する例が少ない。筆者は大学院時代から、上述の張光直と同様な認識を出発点とし、先史集落形態の研究の現状はほぼ空白であるので、この角度からの研究は収穫を期することができると信じ、考古学と歴史地理学との両科目の専門訓練を受けたという有利な条件を利用して、この領域での探求を始めたのである。1985年の修士論文は『黄河流域の先史集落と中国の初期都市』であり（一部はそれぞれ『歴史地理』<sup>(6)</sup>と『国際東方学者会議紀要』<sup>(7)</sup>に発表されている）、当時では、考古地理学の方法を用いて中国の先史集落に対する類似の研究はまだなかった。今になっても、比較的長い年代を範囲とし、具体的な事例検討と大きい地域への巨視的な考察を兼ねる研究はそれ程多くないだろう。

---

（4）同注（2）。

（5）張光直『中国青銅時代』p.107、三聯書店1983年。

（6）拙文「黄河流域の史前聚落」、『歴史地理』第6輯、上海人民出版社1988年9月。

（7）拙文「關於中国的早期都市」、『国際東方学者会議紀要』第34冊、東方学会1989年。

(一)

中国における先史集落研究の「小史」は、次のように手短にまとめることができると思う。野外考古発掘・調査を基礎とした中国近代考古学は、スウェーデン学者のJ・アンダーソン（Andersson, Johan, Gunnar）が1921年河南省渑池県の仰韶村で仰韶文化を発見したことを始まりとすべきである。

その後、考古学の野外作業は次第に展開し始めた。初期のその他の重要な考古発掘・調査作業は次の通りである。

1923年、北京大学の考古学教学研究室主任の馬衡が河南省の孟津で新鄭の銅器の出土場所を視察する。（翌1924年、北京大学で考古学会が創立される。）

1926年、李済が山西省夏県の西陰村にある遺跡を発掘する。これは中国人学者の主宰した初めての考古発掘である。

1927年、中国学術団体協会とスウェーデン探検家のセバン・ヘテン（Sven Andes, Hedin）が共同で西北視察団を構成して、新疆で三年間にわたって、考古発掘・調査作業を行った。中国側の団長は徐炳昶で、黄文弼は北京大学考古学会を代表して参加する。

1927年、日本人学者浜田耕作、原田漱人、小牧実繁、島田貞彦、田沢金吾、宮坂光次らは、北京大学の馬衡、沈兼士と共に遼東半島にある簞子窩遺跡を発掘する。

1928年、中央研究院の歴史言語研究所が創立され、中に「考古組」が置かれ、その年から殷墟の発掘を始める。1937年の日中戦争勃発までに全部で15回にわたる発掘が行われた。

1929年、北京郊外の周口店で裴文中が第1号北京原人の頭蓋骨を発見する。

1930年、アメリカ留学帰りの梁思永が山東省歷城県の城子崖で竜山文化を発見し、並びに城壁も発見した。だが今日では、当時発見された城壁は竜山文化のものではなく、年代の遅い岳石文化のものであることが判明された。

1933年、裴文中と賈蘭坡は周口店の山頂洞にある旧石器時代末期の遺跡を発掘する。

1933－1936年、西湖博物館は浙江省の新石器時代遺跡を調査し、良渚遺跡を発見した。

1934－1935年、比較的重要な野外考古活動に梁思永と尹達が行った同楽娟の発掘があり、また安陽侯家荘西北岡、侯家荘南、大司空村南の発掘などがあげられる。

その後、野外考古発掘・調査が盛んになっていくが、1937年に勃発した日中戦争により中断された。

1921年から1937年にかけて、野外考古は大きな成果を上げた。しかし初歩的段階にあるため、研究の幅はすこぶる限られており、主に「器物」と考古学「文化」に集中していた。たまには先史時代の社会構造あるいは生活状態について触れたものもある。しかし、「集落」そのものに関心を持った研究がほとんどなく、恐らく当時はこの課題に対する関心はまだなかったのだろう。ただ、城子崖で城壁が発見されたとき、それは中国最初期の都市（あるいは都）であるかどうかに関心が集まり、いろいろな論議が引き起こされていた。

このように、地理学的意味での「集落」に対する研究は、初期の時代では全く空白だとは言えないが、関連する研究が少ないのは事実である。

戦時中および戦後の国民党と共産党の内戦期間中には、本格的な野外発掘が行われなかった。戦時の1941－1942年、夏鼐、呉金鼎、曾昭橘らが四川省彭山県の豆芽房と案子山にある崖墓を調査・発掘したことがある。1944－1945年には、西北科学考察団が甘粛省内で考古調査を行う。この調査のもっとも重要な成果の一つは陽窪湾にある齐家文化の墓の発掘であり、仰韶文化の年代が齐家文化のより古いことを証明した。これによって、中国先史考古学の年代学の基礎が確立された。

1949年以降、中国では人文科学と社会科学の学術研究は全面的な打撃を受けていたが、比較的、考古学は現実的な政治から遠く離れていると思われるためか、何も政府を心配させることなく、時には（「文化大革命」のときのように）その発展で学術の繁栄を粉飾することもできるので、結局、他の科目が得られなかった発展が容認された。また、大規模な経済開発および「農業は大寨に学ぼう」という運動によって、大規模な農田の整備開発が必要となり、地下に埋蔵される古い遺跡・遺物は大量に発見・報道され、客観的に、この数十年の考古学に大発見と大発展をもたらしたのである。これらの新しい発見と発表された発掘報告などの資料は、もちろん学者の間で、いろいろな関心を引き起こした。最もよく見られる器物および「考古学文化」などについての研究以外に、考古学者と歴史地理学者も含む一部の敏感な学者は、「遺跡」の形として残っている「集落」そのものに対して興味を持ち始め、次第に各角度からの研究論文を発表するようになった。

中には単独な集落（遺跡）を研究した論文もあれば、より大きい地域範囲内の集落を研究対象とするものもある。90年代に入ってから、考古学者も地理学の方法で中国の先史集落に対して研究・検討し始めた。そのきっかけは、山東省と河南省で規模の大きさにも、集落の間隔にも秩序のある「グループ」的な先史集落群が発見されたことである。これは、考古学者の問題提起の角度に変化をもたらした。いくつもある集落地理学の理論の中で、中心地理論は最も多く引用されていた。このような現象は90年代前までにはかつてなかった。<sup>(8)</sup>

80年代から始まった全国文化財の全面調査は重大な意義をもつ。この全面調査のデータに基づいて、続々と出版される『中国文物地図集』の各省、市、自治区の分冊は、中国全土にある古遺跡の分布状況を公表した。この大規模なプロジェクトによって、私達は中国全土にある古文化及び古遺跡の分布状況を全面的に把握することができるようになった。筆者が関心を持っている先史集落についてもたくさん新しい情報を得ることができたのである。もちろん、その情報は制約される面もあるが、先史集落の立地（所在地）や分布の状況については、たいへん完備した情報を得ることができた。また、把握できる先史集落（遺跡）の量は更に爆発的に増加し、最も意義があるのは先史集落の規模に対しての把握であり、きわめて大量のデータから比較的正確な結論を得ることができた。（ちなみに、思いもよらなかつ



た「結果」の一つとして、これらの『文物地図集』は墓や遺跡の盗掘者にも、より「正確」な古代文物の埋蔵地の情報を提供した。摘発された事件の報道によると、発刊以降は被害が甚大であった。各地の同種の『文物地図集』の出版は暫らく見合わせる必要があるのではないかと検討されていたようだ。）

## (二)

次に先史集落の研究に関する著作と論文の出版状況について検討してみよう。

1950年代以前、先史集落あるいは集落そのものに対する関心はあまりなく、関連する研究は非常に少なかった。著作としては二冊しかない。

一冊は侯仁之の『天津聚落之起源』<sup>(9)</sup>である。この本は厳密に言えば「先史」とはあまり関係がない。と言うのは天津に集落が形成されたのは金代に入ってからのものであり、明代からようやく「天津」という名が現れたからである。しかし中国の歴史集落地理学に関する著作が数少ない中、これは重要な著作の一つである。

もう一冊は戴裔喧の『干欄——西南中国原始住宅的研究（嶺南大学西南社会経済研究所専刊甲集之三）』<sup>(10)</sup>である。これは20世紀前半で、一冊しかない先史時代の居住状況を研究した専門著作である。

1920年代から40年代の末までに、正式に出版された発掘・調査報告は、旅行記に類するものを含んでも、全部で53冊しか存在しない（中に日本人学者の著作が4冊ある<sup>(11)</sup>）。これらは報告及び研究の重点が主に器物と考古学文化の面に置かれている。

1950年代以前に、先史時代の考古学に関する研究論文の数は少なくないが、先史集落到特定した研究はほとんどなかった。地理学的角度からの研究も主に発掘・調査にかかわる地域研究であった。

1950年代以後80年代までに、専ら先史集落について行われた研究はやはり多くない。しか

---

✓(8) 以下の論文を参照。

山東省文物考古研究所、聊城地区文研室「魯西發現八座竜山文化城址」、《中国文物報》1995年4期。

張学海「魯西兩組竜山文化城址的發現及對幾個古史問題的思考」、《華夏考古》1995年4期。

山東省文物考古研究所等「山東陽谷景陽崗竜山文化城址調查与試掘」、《考古》1997年5期。

逢振鐸「山東竜山文化城址的發現及其歷史地位」、《山東社会科学》1995年3期。山東大学歴史系考古專業「山東鄒平丁公遺址第四、五次發掘簡報」、《考古》1993年4期。

「城子崖遺址又有重大發現」、《中国文物報》1990年7月26日。

中美兩城地区聯合考古隊「山東日照市兩城地区的考古調查」、《考古》1997年4期。

山東省文物考古研究所魯中南考古隊、滕州市博物館「山東滕州市西康留遺址調查、發掘簡報」、《考古》1995年3期。

隋裕仁「黄河下遊竜山文化“城堡”初探」、《中原文物》1988年4期。

(9) 侯仁之『天津聚落之起源』、天津工商学院發行、1945年8月。

(10) 広州嶺南大学西南社会経済研究所發行、1948年。

(11) 北京大学考古系資料室編『中国考古学文献目録 1900 - 1949』により、文物出版社1991年7月。

し先史集落の遺跡が大量に発見・報道されたため、一部の敏感な学者は集落地理学的角度から先史集落（遺跡）の実態を探求しはじめた。

代表的な論文はいくつかがある。

歴史地理学者の史念海の「石器時代における人類の居住地および集落の分布」<sup>(12)</sup>という論文は歴史地理学の角度から考古学の資料を利用した論文であり、当時としては全面的に石器時代の居住と集落の分布をテーマとした初期の研究でもあり、この課題の研究の先駆けとなったと言えよう。しかし、最初の試験的な研究であり、また巨視的な角度から全石器時代を視野に入れようとしたため、ミクロ的具体事例の研究がない。

陳橋驛の「歴史時期の紹興地区における集落の形成と発展」<sup>(13)</sup>も代表的な論文の一つである。これは年代的には先史ではなく、有史時代の研究であるが、ある一つの地域空間に限定して、歴史上の集落状態の発展・変化について行われた比較的巨視的な研究であり、とても重要で代表的な論文であろう。

しかし80年代までは、総じて言えば歴史上及び先史の集落に関心を持つ学者はやはり少なく、同類の研究はそれほど多くないことも事実である。

80年代以来、中国の開放政策によって、海外の各種の研究理論が中国に紹介されるようになったことと関連するかもしれないが、先史時代の集落形態に関心を持つ学者が増加してきた。

李徳森・許成の論文「華北中部の旧石器から新石器初期までの集落形態の変化」<sup>(14)</sup>はある一つの地域を視野に入れて人類歴史の初期における集落形態を研究した例である。

巨視的な研究の外に、先史集落のいくつかの具体的な事案を対象とした精密な研究を行う論文が現れ始めた。

代表的なのは鞏啓明・嚴文明の「姜寨の初期村落の配置からその住民の社会的構造と組織についての検討」<sup>(15)</sup>という論文である。この論文は、陝西省臨潼県にある姜寨遺跡の仰韶時代の半坡文化類型の村を研究対象として、同じ文化期における村内外の配置、建物、内部の構造、人口、及び社会構造（例えば家族、部族、部落の組織）などについて、綿密で入念な分析を行った。この数十年間、集落の構造形態に対してミクロ的分析を行った最もすばらしい論文だと考えられる。拙稿の先史集落の人口計算方法は概ねこの論文の方法を採用している。しかし、作者の一人の嚴文明は98年に筆者にこの論文の最大の欠点は集落の平面に配置する建物（主に家屋である）が同じ考古学文化に属するものに間違いはないが、必ずしも絶対年代も同じだとは限らないと語った。

李新偉と賈笑氷の「姜寨一期集落グループの再検討」<sup>(16)</sup>は、上述の集落遺跡について、同じ

---

(12) 史念海『河山集』、三聯書店 1963 年。

(13) 陳橋驛「歴史時期紹興地区聚落的形成与發展」、『地理学報』1980 年 1 期。

(14) 李徳森・許成「華北中部的旧石器至新石器早期聚落形態的变化」、『考古』1995 年 11 期。

(15) 鞏啓明・嚴文明「從姜寨早期村落布局探討其居民的社会組織結構」、『考古与文物』1981 年 1 期。

角度からの再研究である。ただしこの論文も上述の嚴氏が語った欠点については意識していないようである。

そのほかに、先史集落の家屋、住宅などの問題を研究する類似の論文も若干ある。例えば茄士安の「半坡遺跡にある同年代家屋の数の問題について」という論文<sup>(17)</sup>はある一つの集落に対して、ある特定のテーマのしたで行われたミクロ的な研究である。また、周星の「黄河中流・上流における新石器時代の住宅の形式と集落の形態」<sup>(18)</sup>はよりマクロ的な研究である。

前にも述べたように、鞏啓明・嚴文明が論文の中で集落の人口を推算したが、全体的に先史集落の人口を研究した例は多くない。言うまでもなくこの課題は対処しにくく、とても困難である。郭凡の「集落の規模と人口の増加形勢——長江中流地区における新石器時代の各発展段階の人口数量についての研究」<sup>(19)</sup>は格別の一例である。この論文はマクロ的な角度からの研究で、これに類する研究は全体的に少なく、長江流域を視野に入れたのは更に少ない。

このほかに、先史集落に関して、各課題を各角度からとらえる研究が次第に活発になっている。嚴文明の「中国環濠集落の変遷」<sup>(20)</sup>と逢振鏞の「東夷の先史家屋建築及びその変遷」<sup>(21)</sup>と楊傑の「内モンゴル中南部新石器時代から青銅器時代までの家屋建築」<sup>(22)</sup>はこの面の研究例である。

直接に集落の形態を対象とする研究の外、歴史学、考古学と地理学角度の研究も間接的に先史集落とかかわる問題に触れ、先史集落の研究にとって非常に参考になる。譚其驤の「前漢以前の黄河下流の川筋」<sup>(23)</sup>という論文は、直接に集落の問題を検討するのではないが、前漢前までの黄河の川筋の変遷は華北平原の集落の分布に影響を与えたという指摘、そして特に戦国時代前の華北平原の北部は広々としているのに集落がなかったのは黄河に固定した川筋がまだ成立しておらず、華北平原の北部を通して渤海に流れ込んだためであるという結論も、先史集落の分布及び立地の研究にとってはとても意義がある。筆者は華北平原における先史集落の分布状況を研究する時も、丘類集落の分布地域は前仰韶期から、仰韶期を経て竜山期まで、高海拔の地から次第に低海拔の地へと、つまり太行山の東麓から次第に東海方面へ進み広がった軌跡を発見した。つまり別の角度から譚氏と同様の結論を得たのである。

葉青超の「黄河デルタの形成過程と下流川筋の変遷」<sup>(24)</sup>と曾昭璇の「歴史地形から黄河下流

✓ (16) 李新偉・賈笑氷「姜寨一期聚落的重新分組」、『考古』1995年9期。

(17) 茄士安「略談半坡遺址同時期存在房屋的數字問題」、『史前研究』創刊号(1983年)。

(18) 周星「黄河中上游新石器時代的住宅形式与聚落形態」、『中国考古学研究論集——記念夏鼐考古五十周年』、三秦出版社1987年12月。

(19) 郭凡「聚落規模与人口增加趨勢——長江中游地区新石器時代各發展階段的相对人口数量的研究」、『南方文物』1994年1期。

(20) 嚴文明「中国環濠聚落的演变」、『国学研究』2卷、1994年。

(21) 逢振鏞「東夷史前住屋建築及其演变」、『考古与文物』95年3期。

(22) 楊傑「内蒙古中南部新石器時代至青銅時代居址建築」、『内蒙古文物考古文集』、中国大百科出版社1994年8月。

(23) 譚其驤「西漢以前的黄河下游河道」、『歷史地理』創刊号(1981年)。



デルタ平原の形成過程<sup>(25)</sup>についての検討」は、ともに自然地理学の角度から上述の華北平原を流れる黄河の川筋の歴史の変遷という課題に関する研究であり、黄河下流の先史集落の分布を検討する際の参考文献である。

王小盾の「中国先史文明研究の地理学的方法」<sup>(26)</sup>は、地理学者が先史文明研究の理論を検討するものであり、逆に李先登の「中国古代文明の起源及び地理環境との関係試論」<sup>(27)</sup>は歴史学者が先史文化発展の地理的原因を検討する試みである。両者は直接、先史集落の問題にふれてはいないが、その研究方法と問題を考える角度は大変参考になるだけの価値があると思われる。

金国樵、潘賢家と孫仲田が書いた「中原仰韶文化タイプ形成の地理学的及び生態的原因の試論」<sup>(28)</sup>と、孫瑞寧の「我が国における新石器時代の文化の発展と地理環境変遷との関係」<sup>(29)</sup>は、考古学者が先史文化と地理環境との関係に関心を持つことを示した例である。この二篇の論文は、集落形態の問題に直接関連せず、先史集落と地理環境との関係を検討したものである。

徐其忠の「古文化遺跡の分布から7千年－3千年前における山東省北部の地理地形の変遷についての検討」<sup>(30)</sup>で用いられた方法論は拙稿の第1章において、黄河流域の先史集落の分布状況を研究する方法と共通点がある。ただ検討する問題が異なっている。

### （三）

中国の先史集落に関して、日本の学者も相当な関心を持ちつづけて研究を行ってきた。前にも言及したように、1927年、日本人学者浜田耕作、原田漱人、小牧実繁、島田貞彦、田沢金吾、宮坂光次の各氏は、北京大学の馬衡、沈兼士と共同で遼東半島にある篋子窝遺跡を発掘した。これは日本人学者の中国での最初の発掘・調査であった。その後、東京大学と京都大学から交代で毎年1名ずつを北京大学に留学生として派遣するようになり、そのときの留学生だった駒井和愛、水野清一、江上波夫、田村実造、三上次男、小野勝年、関野雄らがそれからの日本の中国考古学研究の中堅となった。

戦後の長い間、日中間に外交関係がなく、また中国国内の事情で日本人学者の中国での調査が不可能になった時代があった。しかし、日本人学者の中国考古学に対する関心はずっと持たれている。『史学雑誌』の毎年の研究状況のまとめにも必ず中国考古学の現状及び日本人

---

✓ (24) 葉青超「黄河沖積扇形成模式和下游河道演变」、『人民黄河』1982年4期。

(25) 曾昭璇「從歷史地貌看黄河下游扇形平原形成的模式」、『人民黄河』1983年3期。

(26) 王小盾等「中国史前文明研究的地理学方法」、『上海師範大學學報』1994年3期。

(27) 李先登「試論中国古代文明起源与地理環境關係」、《河洛文明論文集》、中州古籍出版社1993年7月。

(28) 金国樵・潘賢家・孫仲田「試論中原仰韶文化模式的地理生態原因」、《論仰韶文化——紀念仰韶村遺址發現六十周年學術討論會論文集》、《中原文物》編輯部1986年12月。

(29) 孫瑞寧「我国新石器時代文化發展与地理環境變遷的關係」、《文物資料叢刊》10輯、文物出版社1987年3月。

(30) 徐其忠「從古文化遺跡分布看距今七千年—三千年前魯北地区地理地形の變遷」、《考古》1992年11期。

学者の研究が紹介される。また、時間がかかり過ぎるとも気がするが、日中戦争期の調査成果を整理し、その報告をまとめることもなされた。その中には、先史集落に関する報告が若干ある。例えば、「遼東半島の先史遺跡（調査抄報）」<sup>(31)</sup>は、山東龍山文化の影響が遼東半島へ及んでいたことを解明するために、半島東岸沖の大長山島・上馬石貝塚において1941・42年に行われた発掘調査の抄報である。

また、積石墓については「遼東半島の積石塚」<sup>(32)</sup>などのものがある。この他に、1960年には関野雄編『世界考古学大系 東アジアⅠ 先史時代』が出版され、発掘資料を中心とした多数の写真が掲載されている。

90年代以後、中国国内法の整備で外国人の中国国内での発掘・調査が可能になった。これをきっかけに、日本人学者の中国国内での発掘・調査活動が活発に行われるようになった。例えば、秋山進午らは中国東北地方における先史時代の研究を目的として、1990－92年に遼寧省文物考古研究所と共同で凌源県城子山遺跡・阜新市南梁遺跡・大連市王山頭遺跡・鳳城県東山遺跡の考古学的な測量調査を実施している（秋山進午編『東北アジアの考古学研究（日中共同研究報告）』<sup>(33)</sup>）。本書に上記の共同調査報告（第2部）及び第1部「日中共同考古学研究の経緯」のほかに、第3部では、「東北アジア考古学研究」というテーマの下に日中両国研究者8人の計11篇の論文が収録されている。青銅器時代に関する論文が比較的多いが、新石器時代を論じた論文も3篇ある。その中には、岡村秀典の「遼河流域新石器文化の居住形態」のように集落居住形態を研究する論文もある。また、秋山進午らは牧畜の形成を明らかにするため内蒙古自治区文物考古研究所と共同で岱海地区の遺跡群について発掘・調査を行っている。また、福岡教育委員会、京都大学岡村秀典氏は湖北省荊州博物館と共同で陰湘城を調査している<sup>(34)</sup>。量博満らは浙江省文物考古研究所・北京大学考古学系と共同で浙江省普安橋良渚文化墓地に対して発掘調査をおこなっている。1996年には、安田喜憲が成都市文物考古工作隊、四川大学文学院と共同で新石器時代の城郭である四川省成都市龍馬宝墩遺跡の環境考古学的な調査をおこない、早稲田大学長江流域調査隊は成都市文物考古工作隊、四川大学文学院と共同で同遺跡について発掘調査を実施している<sup>(35)</sup>。

外国人の中国国内での発掘・調査が可能になったためか、日本国内での中国先史集落の研究は、90年代以来、比較的活発に行われ、日本語で発表される論文が以前より数多くなった（一部の在日中国人研究者の論文も含まれている）。

その中でも、先史集落の構造や居住形態について岡村秀典の研究は注目されている。氏の

(31) 澄田正一「遼東半島の先史遺跡（調査抄報）」、『愛知学院大学文学部紀要』16号、1987年。

(32) 澄田正一「遼東半島の積石塚」、『愛知学院大学文学部紀要』20号、1990年。

(33) 秋山進午編『東北アジアの考古学研究（日中共同研究報告）』、同朋舎出版、1995年。

(34) 岡村秀典・張緒球編『湖北陰湘城遺跡研究（Ⅰ）』、『東方学報』京都69号、1997年。

(35) 岡村秀典「戦後日本の中国考古学研究」、『日本考古学』第6号特集『日本考古学の50周年』。

「仰韶文化の集落構造」という論文<sup>(36)</sup>は黄河流域における仰韶文化時期の集落形態について、先ず住居の構造（1、住居の形態と内部施設、2、住居内部の生活復原）及び集落の基礎単位（1、基礎単位の把握、2、基礎単位の実態）の分析から研究を展開し、その上、「姜寨遺跡の集落構成」の段落で姜寨遺跡の事例を詳しく検討した後、仰韶文化の集落構造及びその背景について結論を纏めたのである。作者は当時の集落が四レベルの単位からなるとする上で、最小なのが各住居に住む核家族で、それ自体では集落の基礎単位にならない。基礎単位は複数の核家族が親族関係によって結びついた拡大家族で、それ自体が増殖分裂することによって小レベルの住居群を構成する。基礎単位が幾つか結びついた中レベルの住居群が公共的性格を持つ大型住居の周囲に形成され、それらが中央広場を囲んで集落を構成すると主張する。日本語で書かれる中国考古学を研究する文献の中で、仰韶文化時期の集落構造に関して、ミクロ的とマクロ的両方から着目した数多くない優れた論文だと言えよう。

同氏の論文「中原竜山文化の居住形態」は関係資料も検討も比較的少ない竜山文化の居住形態に着眼し、<sup>(37)</sup>中原竜山文化時期の一般集落は住居の存在形態として分散型と密集型との2類型に大別できると指摘した。これまでに指摘されてきた仰韶文化に比べて中原竜山文化の住居は一樣に小型化し、核家族への進化が想定され、散村化（「分散型」）が始まるとの説を認めた上で、「それと同時に、社会全体の緊張が高まり、集団間の抗争が激しくなった結果、多数の共同体構成員が集住して防衛にあたる密集型集落が新たに出現する」と指摘し、龍山文化中・後期における分散型集落から密集型への移行を確認しながら、「中原竜山文化の集落は、内部に家の自立と共同体規制との相対立する矛盾を抱え、外部に集団間の抗争という大きな矛盾を抱えていたのである」という結論に達した。数多くない竜山文化時期の集落形態に関する論文の中で新しい見解を展開した論文である。

同氏の「遼河流域新石器文化の居住形態」は遼河流域の新石器を3期に分けてその居住形態を「動態的に」検討したものである。<sup>(38)</sup>

岡村は現地の発掘・調査に携わったことがある。中国の城郭集落・囲壁集落また中国都市文明の起源などの問題について、調査報告及び数多くの論文において見解を述べている。

（氏の次の論文を参照。「長江中流域における城郭集落の形成」、『日本中国考古学会会報』7号、1997年。「湖北陰湘城遺跡研究」（張緒球と二人執筆）、『東方学報』京都69号、1997年。「石家河遺跡と中国都市文明の起源」、『住の考古学』（藤本強主編）、同成社1997年。等。）

王小慶の「中国新石器時代の集落」<sup>(39)</sup>は90年代までに発見された中国新石器時代の幾つかの

---

(36) 岡村秀典「仰韶文化の集落構造」、『史淵』128期、1991年2月。

(37) 岡村秀典「中原竜山文化の居住形態」、『日本中国考古学会会報』第4号、1994年。

(38) 岡村秀典「遼河流域新石器文化の居住形態」、秋山進午編『東北アジアの考古学研究（日中共同研究報告）』、同朋舎出版1995年。

(39) 王小慶「中国新石器時代の集落」、『文化』第61巻第1・2号、東北大学文学会、1997年。

代表的な集落の平面形態及び家屋の幾つかのタイプを紹介・検討し、中国新石器時代の集落が原始農耕の成立を背景に迅速に発達してきたと指摘する。また、地理的環境と経済類型の相違があるが、「基本的に、集落構成は凝集・封閉式のものである」という結論をまとめた。

王小慶にまた「仰韶文化の集落構成の研究——黄河中流域の関中地区を中心に」という論文<sup>(40)</sup>がある。この論文は関中地区（陕西省の中部）に焦点を当てて、この地区にある仰韶文化時期の「集落構成」について、家屋（住居跡）の分類、分析、集落構成の基礎単位、集落の構成などの角度から検討を行ったものである。具体的な例がたくさん挙げられているのはこの論文の特徴である。

仰韶時代から環濠集落がたくさん現れたため、研究者の注目を集めた。共通点があるためか、環濠集落を研究する論文は東アジア全域を視野に入れたものが少なくない。例えば、後藤直の「東アジアの環濠集落」<sup>(41)</sup>、徐光輝の「東アジアの環濠集落遺跡」<sup>(42)</sup>、寺沢薫の「環濠集落の系譜」<sup>(43)</sup>などが挙げられる。

中国のある地域を対象とした研究はつぎの例がある。西谷大の「中国東南沿岸部の新石器時代」<sup>(44)</sup>、小富山真実子の「内蒙古南部における仰韶文化の出現」<sup>(45)</sup>などである。大貫静夫の「『中国文物地図集—河南分冊—』を読む——嵩山をめぐる遺跡群の動態——」<sup>(46)</sup>はある地域（嵩山）を限定し、「遺跡群の動態」を分析したものであり、しかも『中国文物地図集』（河南分冊）の資料を利用した非常に特徴のある論文である。

あるテーマに絞った研究は甲元真之の「中国先史時代の集落と墓地」<sup>(47)</sup>と同氏の「環東中国海の先史漁撈文化」<sup>(48)</sup>があり、また田河禎昭の「仰韶文化の埋葬について」<sup>(49)</sup>、宮本一夫の「華北新石器墓制上にみられる集団構造—1」<sup>(50)</sup>などの研究論文がある。このほか、非常に大きなテーマを扱った研究もあり、例えば今村佳子の「中国先史時代の文化類型と動態」<sup>(51)</sup>と「中国新石器時代の社会構造」<sup>(52)</sup>という論文はその例である。

---

(40) 王小慶「仰韶文化の集落構成の研究——黄河中流域の関中地区を中心に」、『歴史』91輯、東北史学会 1998 年 9 月。

(41) 後藤直「東アジアの環濠集落」、『九州考古学』73号、1998年12月。

(42) 徐光輝「東アジアの環濠集落遺跡」、『ヒストリア』152号、1996年。

(43) 寺沢薫「環濠集落の系譜」、『古代学研究』146号、1999年5月。

(44) 西谷大「中国東南沿岸部の新石器時代」、国立歴史民俗博物館研究報告)70号、1997年1月。

(45) 小富山真実子「内蒙古南部における仰韶文化の出現」、『物質文化』66号、1999年3月。

(46) 大貫静夫「『中国文物地図集—河南分冊—』を読む——嵩山をめぐる遺跡群の動態——」、藤本強主編『住の考古学』、同成社 1997 年。

(47) 甲元真之「中国先史時代の集落と墓地」、『異化過程』1996年3号。

(48) 甲元真之「環東中国海の先史漁撈文化」、『論叢(歴史)』65号、1999年3期。

(49) 田河禎昭「仰韶文化の埋葬について」、『考古学研究』21巻3号、1975年2月。

(50) 宮本一夫「華北新石器墓制上にみられる集団構造—1」、『史淵』132号、1995年3月。

(51) 今村佳子「中国先史時代の文化類型と動態」、『古文化談叢』36号、1996年6月。

(52) 今村佳子「中国新石器時代の社会構造」、『古代学研究』136号、1996年11月。

堀敏一の『中国古代の家と集落』<sup>(53)</sup>は唐代以前の中国古代の家と集落の形態について全面的な検討を行った。この本は比較的反響が大きいようで、調べた限り重近啓樹・竹浪隆良両氏と山根清志がそれぞれ書評を書いている。<sup>(54)</sup>しかしこの本は主に周代以後の歴史時代の家と集落を研究したもので、先史集落についての検討は特に行われていない。

池田雄一の「石器時代の集落」<sup>(55)</sup>は中国の新石器時代の集落形態についての研究である。仰韶文化時期では集落内部の強固な共同性を示しているのに対して、竜山文化時期では各家の自立性が高まって、集落自体も「散村化」の傾向が始まったと指摘している。これは1980年代頃の共通の認識だが、ここ二十年間の新しい発見から見てもこの基本パターンは変わっていない。しかし、数多くの城壁（囲壁）集落の発見によって、中国新石器時代の集落、特に竜山文化時期の集落内部構造の複雑さも次第に認識され、また、集落間の関係についても中心地理論とか、集落群とかの新しい概念が次第に導入されている。

藤本強主編の『住の考古学』<sup>(56)</sup>は東京大学考古学研究室五十周年記念文集であり、二十数篇の論文が「住み」というテーマを中心として検討を行った。中では中国先史集落について朱延平（「新楽・趙宝溝集落の考察」）、高蒙河（「良渚文化の居住形態に関する研究」）、大貫静夫（「『中国文物地図集一河南分冊』を読む——嵩山をめぐる遺跡群の動態——」）、中村慎一（「石家河遺跡と中国都市文明の起源」）、飯島武次（「東下馮遺跡殷代窯洞式住居址」）らがそれぞれの角度から論議をしている。朱、高両氏は中国の東北と江南でそれぞれ数多くの遺跡を発掘した経験があり、論題は各自の得意分野である。

中国で城壁（囲壁）のある集落は仰韶文化の後期から次第に現れ、竜山文化時期に入ればさらに数多く増え、一部の地域での発見から見ると、集団的に現れたこともある。この現象を研究する日本語の論文も少なくない。上記の『住の考古学』に所収される中村慎一氏の「石家河遺跡と中国都市文明の起源」もその一篇である。同氏には城壁（囲壁）のある集落についての研究はほかにも「中国における囲壁集落の出現」<sup>(57)</sup>がある。

以上は中国の先史集落についての、各立場からの研究に関する簡単なまとめである。ここからすると、今までの研究は大体二種類に分けることができる。一つはマクロ的な研究で、つまり一つの大きい地域を対象とした大規模な集落形態の検討であり、もう一つはミクロ的な研究で、つまりある一つあるいは若干の集落の遺跡を対象とした具体的な集落形態の検討である。筆者の「黄河流域の先史集落」<sup>(58)</sup>は、マクロ的とミクロ的な視野を兼ね備えた研究であ

---

(53) 堀敏一『中国古代の家と集落』、汲古書院1996年11月。

(54) 重近啓樹・竹浪隆良：「堀敏一著『中国古代の家と集落』」、『駿台史学』106号、1999年3月。

山根清志：「堀敏一著『中国古代の家と集落』」、『古代文化』50巻8号、1998年8月。

(55) 池田雄一「石器時代の集落」、『中国集落史の研究－周辺諸地域との比較を含めて』、唐代史研究会、1980年。

(56) 藤本強主編『住の考古学』、同成社1997年。

(57) 中村慎一「中国における囲壁集落の出現」、『考古学研究』1997年9期。



る。寡聞ながら今まで、同じような研究の例はやはり多くはないだろう。

## 二、初期都市研究の発展

### (一)

中国都市の起源、発展などの問題は、近代以来、多くの研究者の関心を引きつけたため、関連する論文が先史集落の論文よりはるかに多く、50年代までには主に文献資料からの研究が多かった。考古発掘の資料を利用し、または近代考古学および近代集落地理学の角度から行われた研究はそれほど多くなかった。50年代以後、発掘調査の資料が増えたため、中国の古代都市に関する研究は次第に考古学資料から離れられなくなった。ここでは近代以来の都市研究の状況、特に初期都市（都市の起源）に関する研究状況を簡潔に見てみよう。

従来の中国の学者の関心は、限りのあるものであった。このため、初期都市に関する従来の研究を建築史の角度から顧みれば、幾分収穫が得られると思うが、都市地理学の立場からすると、あまり期待ができるとは言えないだろう。「都市」が学者の研究、検討の課題になる事自体はもちろん近代に入ってからのものであり、近代科学の影響を受けた後に現れたことである。

近代に入って、最初に学問的に古代の都市を研究・検討したのは当時最も優れた近代科学的意識を持つ学者の一人梁任公（啓超）である。彼は「中国の都市」を書いた<sup>(59)</sup>。この論文はもちろん主に文献を引用したもので、意識的に考古学資料を利用することができる時代ではなかった。論文は『公羊伝・宣十五年・何休注』の「民春夏出田、秋冬入保城郭」（「民は春夏は畑に出て、秋・冬は保養に城郭に入る。」）を引用して、「城郭は農民が食糧を蓄え、農閑期の休息地であるしかない」との考えを示した。その後、職業はだんだん細分され、商工業者および役人者は集中して定住し、そこで「国」と「野」に分かれることが始まり、その後「野」が拡張して村になり、「国」が広がって都市になったと梁啓超は指摘する。また、「後代の都市は政治、軍事、商業という三種類に分けることができるが、古代にさかのぼって見ると一つの源から出たものだ」とも指摘した。これは即ち梁啓超の目に映った都市の起源史である。梁氏はそのほかにまた「中国都市小史」を書き、主に歴史的角度から簡単な概説であった<sup>(60)</sup>。

褚紹唐は地理学者で、早くから地理学の角度で都市問題を研究し始めた学者でもある。彼の「中国都市の地理学的要素」は古今の中国都市の地理学的要素を検討したものである。そ

---

✓ (58) 同注(6)。

(59) 梁任公(啓超)「中国之都市」、『史学与地学』1期 2期、1926年12月、1927年7月。

(60) 梁啓超「中国都市小史」、『晨报』七周年記念増刊、1926年10月。

(61) 褚紹唐「中国都市之地理的因素」、『地学季刊』1巻2号、1933年3月。

のほかに、忻啓三の「都会の地理学的考察」<sup>(62)</sup>と鄒豹君の「中国都市の分布と地形」<sup>(63)</sup>も同様の研究である。二人とも歴史上の都市に触れたが、考古地理学の角度からの検討には及ばなかった。なぜなら、その時には、利用できる考古発掘の資料はまだ少なく、考古地理学の角度からの検討ができるのはまだ早いと言わざるをえなかった。

劉興唐の「中国古代貿易の発展と都市の起源」<sup>(64)</sup>という論文は都市の起源を検討し、それは経済（商業）的原因によるものとした。この観点は影響が大きく、同様な観点を持つ論文が多数あり、今なお「都市であれば必ず「市」（商業）があるはずだ」と考える人がいる。例えば沙学浚が『都市と準都市集落』<sup>(65)</sup>にてこの見解を述べている。

三、四十年代を通して、経済と商業の角度から古代都市と都市の起源問題を検討する論文が多かった。例えば「中国都市発生の原因」<sup>(66)</sup>もその中の一篇で、経済の角度から検討したものである。また経済学者の傅築夫は上古の人類がよく移住し、都城の移動も頻繁だった原因がやはり経済面にあり、例えば土地の地力の低下により、新しい土地を求めなければならなかったと力説した<sup>(67)</sup>。

前にも紹介した侯仁之の『天津集落の起源』<sup>(68)</sup>も、都市研究についての重要な文献の一つである。だがこの本は一般論としての都市の起源問題にはあまり触れなかった。

総じて見れば、50年代以前は、都市と関連する研究はそれほど多くなかった。また中国人数学者の研究のほかに、外国人学者の研究成果が紹介されることもあった。例えば何健民がナポリゼンの「中国古代都市の研究」<sup>(69)</sup>を訳し、李秉衡がレハトの「封建主義下の都市の発生と発展」<sup>(70)</sup>を訳した。しかしそれはいずれも筆者の関心を持つ集落地理学の角度からの研究ではなかった。

## （二）

1949年以後70年代末までには、人文地理学という科目そのものが「ブルジョア学問」とされ、容赦なく批判されていた。学問として、存在する余地さえなかった時期である。それゆえに、都市研究、特に都市の起源問題の研究は決して活発ではなかった。

その代わり、マルクス主義の歴史学のみが認められていた。都市の起源についてはエンゲ

---

(62) 忻啓三「都会之地理学的考察」、『方志月刊』6巻4号、1933年4月。

(63) 鄒豹君「中国都市分布与地形」、『師大月刊』15期、1934年11月。

(64) 劉興唐「中国古代貿易之発展及都市之起源」、『文化批判』2巻6号、1935年5月。

(65) 沙学浚『城市与似城聚落』、国立編譯館（台北）1974年。

(66) (仁)「中国都市発生の原因」、『東方文化』（上海）1巻6号、1942年11月。

(67) 傅築夫「我国古代城市在国民经济中的地位与作用」、『中国经济史論叢』（上）、三聯書店1980年1月。

(68) 侯仁之「天津聚落之起源」、天津工商学院発行、1945年8月。

(69) 那波利貞原作、何健民訳「中国古代都市の研究」、『時事類編』5巻9号、1937年5月。

(70) レハト原作、李秉衡訳「封建主義下都市の発生と発展」、『食貨』5巻11号、1937年6月。

ルスのできあいの結論がすでにあった。それは「新たに築城工事を施した都市のまわりの威嚇的な囲壁は、いわれなく屹立しているわけではない。囲壁の濠には氏族制度の墓穴が口をあけ、囲壁のやぐらはすでに文明時代にはいってそのなかにそびえているのである。」という有名な説であった。<sup>(71)</sup>

つまり都市出現の根本的な原因は階級闘争（実のところ経済的基礎決定論）であり、しかもそれは文明時代と同時に出現したと表現している。この時代に書かれた都市の起源を論じる論文はいろいろな角度から、繰り返してこの点だけを証明しようとした。

80年代以後は、考古学の発展と資料の増加に従って、当時の「思想解放」の呼びかけもあって、都市研究は比較的活発になり始め、既存の結論にもあまりこだわらなくなった。代表的な論文は次の通りである。

杜瑜の「中国古代都市の起源と発展」<sup>(72)</sup>は、都市の起源問題を論ずる時はやはりマルクス主義の「経典」を引用したものの、同時に多くの古典文献も引用した。例えば『軒轅本紀』、『世本・作篇』、『呂氏春秋・君守篇』、『淮南子・原道訓』、『呉越春秋』などの古書に記録されている関連する内容を引用して、中国古代都市の起源問題をより詳しく検討した。この論文は多くの考古学資料も利用しており、例えば城壁が発見されている若干の先史遺跡についても入念に検討した。しかしこの論文の都市の判断方法は、やはり城壁及び文明の発生といった今までの「標準」を離れていない。

葉驍軍は「中国都城規制の考略」<sup>(73)</sup>で古代の都を中心として検討した。主に文献を引用して、少し考古学資料も用いた。この論文は都市の型式学の研究で、中国古代の都市を雛形期、発展期、成熟期と、三期に分けて論じ、特に雛形期の研究では多くの考古学の資料を使っている。いわゆる「規制」は実は類型、配置を指すことで、比較的特色のある論文であった。

葉驍軍がこの他に、『中国都城の発展史』<sup>(74)</sup>という本も出している。この本は主に「王都」に論題を集中し、一般論としての「都市」にはあまり言及していなかった。第一章の「萌芽期の都」と第二章の「原形期の都」は中国の最初期の王都を検討したもので、多くの考古学の資料を集約的に利用した上、関連する文献も大量に引用している。その引用した考古資料は大体、80年代中期までのものである。もちろん、初期都市は確かにその時の都（王都）と密接な関係があるかも知れないが、両者が必ずしも一致するわけでもない。それに、発掘で発見された「城壁」のある遺跡との関連もあって、この三者（三つの概念：「初期都市」・「王都」・「城壁」）の関係が実に複雑である。この本はこれらの問題に直接触れておらず、また都市の定義など理論問題にも言及しなかった。

(71) エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』、日本語訳は土屋保男訳新日本出版社 1999年版P.221による。

(72) 杜瑜「中国古代都市の起源と発展」、『中国史研究』1983年1期。

(73) 葉驍軍「中国都城規制考略」、『蘭州大学学報中国古代史論文輯刊』、1983年。

(74) 葉驍軍『中国都城発展史』、陝西人民出版社 1987年2月。

1985年、アメリカの考古学者の張光直（K.C.Chang）は「中国の初期‘都市’<sup>(75)</sup>という概念について」という論文を発表した。この論文は考古地理学の論文と思われて、着眼点は筆者が関心を持つ初期都市の現れる時期の問題と関連する。張光直は考古資料のほかに、また地理学者のチャルト（V・Gordon.Childe）の1950年に提唱した都市についての10ヶ条の定義を援用した。この論文は特に中国と西洋との差異を強調し、たとえ同じく「都市（city）」と称しても内容（中身）は異なることもありうるとし、「中国都市の初期形式は独自の特徴がある」と主張した。また「都市の出現は、中国古代における集落形態史の過程において、相互関連する一連の変化によって表されているので、城郭の出現はただその中の一項目に過ぎない」と指摘した。さらに二里岡期と殷墟期の資料をあげて、「考古材料において反映されている新しい集落形態の含んだ要素は普通、少なくとも次の何項目かがある：1、土つき城壁、戦車、兵器；2、宮殿、祖廟と陵墓；3、祭祀法器（青銅器を含む）と祭祀遺跡；4、手工業屋敷；5、集落配置の計画上と方向上の規則性」との見解を述べた。この論文には独特な考え方がある。例えば青銅器の原料となる銅錫鉱石の資源地と（夏商周）三代の都の所在地との関係を分析し、特に「夏代の都の分布区は中原の銅錫鉱石の分布区とはほぼぴったり合う」と指摘する。商代の都の所在地も「採掘に都合よく、また鉱物資源を争奪するための戦争にも都合がよい（立地）」、「周代の都は西から東へと順次移ってきて、もちろん天下を争うためだが、また鉱資源を求めるためでもあった。陝西省内には銅錫の鉱石源が少ないためだ。」とか、「これらの現象は三代の都が王室の政治的権力闘争の道具としての性質を表している。」なども指摘した。これらの論文は中国の学者たちにして見れば着眼点が大変新鮮で、中国の学界で大きな反響を引き起こした。しかしこの論文は都市の定義問題について、仕方がないのか、「たとえ同じ『都市（city）』と称しても内容（中身）は異なることがありうる」という表現を用いている。結局、最も重要な普遍的な意義を持つ都市の具体的な定義については、実のところ、やはり回避したのである。

1984年、馬世之は「我が国の古代城壁構造の基本的パターンに関する試論」の論文を発表した。この論文は「城壁は人類社会の発展が一定の段階に達したときの産物だ」と述べ、上述のエンゲルスの「新たに築城工事を施した都市……すでに文明時代にはいつている」との論述をも引用して、再びマルクス主義の社会発展史の正しさを証明しようとした。この論文はまた次のような論述がある。それはよく外国人に「どうして中国古代の城（壁）はほとんど方形なのか」と聞かれて、答えは「これは豆腐形のような方形の畑を計画する方法と、‘天が丸く大地が方形’（‘天圓地方’）の概念とに支配されていたため生まれた（やり方だ）」というくだりである。

李先登の「中国都市の起源試論」<sup>(77)</sup>は、発掘された王城岡、平糧台、辺線王城という三ヶ所

(75) 張光直（K.C.Chang）「關於中国初期‘城市’這個概念」、『文物』1985年2期。

(76) 馬世之「試論我国古城形制的基本模式」、『中原文物』1984年4期。

の城壁のある「都市」を論じたものである。「上述の考古発見は中国の古代都市が原始社会の末期に最初に現れ、まず建設されたのは城壁だ」とし、また例のエンゲルスの「新たに築城工事……すでに文明時代に……」という論説を引いて、「都市の出現が文明発生の一つの標識だ」と、結論をつけた。しかし「都市」とはなにかについてはまったく触れていない。

史建群は「中国古代都市の配置計画の形成略論」<sup>(78)</sup>にて、「中国古代都市の主な特徴は政治都市だった」と、「都市の配置は建国及び都を設立する際、まず‘国’と‘野’の境目を整理して定めておき、宮殿建築は祖廟を優先して、主要な地位を占めさせて、貴族の名分に従って都の等級を決定する」との特徴もあると述べた。同論文はまた春秋戦国時代に「新興の地主階級」は「新しい都市の配置原則を探索し始めた」と指摘して、秦漢以後、集権制の封建的国家は「天子の威を重んじよう」という思想のもとで「都市の配置と計画は厳粛で規則正しくきちんとしているが、重苦しく停滞して、活気がない面もある」とも指摘した。この論文はまた（都市の）「配置計画の基本思想と具体的な形式が秦漢の時にすでに完全に成熟していた」との見解も述べた。この論文も都市の定義問題には触れていない。

隋裕仁の「黄河中流と下流の竜山文化の『城砦』についての検討」<sup>(79)</sup>という論文は、竜山文化における「城砦」の立地について、型式学的分析を行った。この論文は五ヶ所の竜山城砦（王城岡、平糧台、城子崖、後岡、辺線王城）を二種類に分けて、第一種類は「遺跡を制する高地に建てられ、1万㎡、城壁が住宅地をほぼはりめぐらしている」ものであり、第二種類は地形上、防衛しにくい黄河沖積平原に位置し、「戦争や略奪に標的とされやすい個所」である。

董琦の「我が国の先史時期の城砦論」<sup>(80)</sup>という論文に、比較的新しい見解が若干ある。例えば集落の機能についての検討から出発して、初期都市の「政治的中心と宗教的中心という機能の意義」を強調した。また「城砦の出現を国家の誕生と同一視するのは考え違いではないか」と従来の見解を疑問視して、「我が国歴史上の『城』の概念と近代からの『都市』の概念とは極めて大きい相違を持っており、世界各国の『都市』の概念とは、また更に極めて大きい差異を持っている」と指摘し、一部の城砦は「ただ城壁のある農村だ」、「決してすべての城砦が都市まで発展するとは限らない」とも指摘した。これらは見識が高い見解であると言える。

楊寛は1993年に『中国古代都城制度史の研究』<sup>(81)</sup>を出した。これもまた重要な著作の一つである。この本は「都城」に力点を入れ、都市の定義の問題を自然に避けた。この本は、考古

(77) 李先登「試論中国城市之起源」、《天津師大学報》1986年5期。

(78) 史建群「簡論中国古代城市布局規劃的形成」、《中原文物》1986年2期。

(79) 隋裕仁「黄河中下游龍山文化‘城砦’初探」、《中原文物》1988年4期。

(80) 董琦「論我国史前時期的城堡」、《北方文物》1988年4期。

(81) 楊寛『中国古代都城制度史研究』、上海古籍出版社1993年12月。



資料を大量に引用するだけでなく、文献資料の面も完備なものとなっている。先史の仰韶文化における集落（村）および竜山文化の城砦から明・清時代の北京城まで考察を行い、中国の「都城」の歴史について全面的に検討を加えた。この課題を研究する学者にとっては末長く参考になるものであろう。ちなみにこの本の前半部分は日本語訳がある（『中国都城の起源と発展』<sup>(82)</sup>）。

1996年、優れた著作が出版された。それは賀業鉅の『中国古代都市の計画史』であり、B5版680ページにわたる大作である。古代都市の計画についての研究を中心として、型式学<sup>(83)</sup>の角度から着眼しているが、内容は全面的で、先史集落の計画および配置について詳しく論述している。この本は初期都市の起源問題に関しては、直接的な定義問題を回避して、「都邑」という一語で夏、商、周の三代の全過程をカバーして、「萌芽段階」、「発展段階」、「成熟段階」と、都市（計画）発展を三段階に分けた。第四章（春秋から秦漢へ）からはようやく正式に「前期封建社会の都市計画」を述べ、「都市」の名称を使い始める。この本は独自の理論体系を作りだし、論を展開するやり方が、非常に優れていると言えよう。

筆者自分の初期都市に関する研究についてもすこし述べたい。筆者の修士論文は「黄河流域の先史集落と中国の初期都市」と題し（1985年に完成、復旦大学に提出）、その後半は中国の初期都市についての検討であり、考古資料と文献資料を連結させて行われた研究で、都市の定義問題についても簡単に触れた。前述のようにこの部分の主な内容は既に日本で発表されている<sup>(84)</sup>。

ここ20年以来、中国での都市起源及び都市史についての研究著作と論文は相当な量に達している。しかしその大部分は新しい見解があるとは言いにくく、無理にこじつけるものもあるといわざるをえず、優れた著作がそれほど多くないのは事実である。

### （三）

中国の都市の出現・発展については、日本の学者も関心を持ちつづけて研究を行ってきた。しかし比較的、日本学者の関心の多くは歴史時代に、特に宋代や明・清時代の都市研究に集中し、そこに力を入れているようなので、中国の初期都市の研究に関心を持った学者がそれほど多くはないし、関連する論文もそれ程多くはないことは事実である。

比較的初期の論文には那波利貞の「支那都邑の城郭とその起原」がある<sup>(85)</sup>。初期の都市にまでは及ばず、文献の研究にとどまっており、考古学資料の利用があまりなされていない。

宮崎市定は「中国城郭起源の異説」で独自の中国城郭の起源説を展開している。商代以前<sup>(86)</sup>

(82) 楊寬著、尾形勇・高木智見共訳『中国都城の起源と発展』、学生社1987年11月。

(83) 賀業鉅『中国古代城市規劃史』、中国建築工業出版社1996年3月。

(84) 拙著「關於中国的早期都市」、『国際東方学者会議紀要第34冊』、東方学会1989年。

(85) 那波利貞「支那都邑の城郭と其の起原」、『史林』10巻2号、1925年。

は宮殿を囲む城壁あるのみであるが、春秋戦国時代以降になると、宮殿区を取囲む子城及び民を集住せしめる作坊区・居住区を囲む大城、即ち外郭城が成立したと指摘する。しかし、挙げられた例がすべて有史年代のもので、先史及び初期都市に関しては特に見解を述べなかった。

宮崎市定にはほかに「中国上代の都市国家とその墓地——商邑は何処にあったか」という論文がある。<sup>(87)</sup>この論文は直接、都市の起源や初期都市について論じてはいないが、中国の古代都市国家である殷の都の所在地について独自の見解を述べた。それは河南省安陽小屯村にある「殷墟」と見なされている遺跡は実は「殷墟」ではないということである。論文では、「殷墟」であると主張したのは羅振玉で、彼が司馬遷の『史記』の項羽本紀に「洹水の南の殷墟上で」という記載があることから断定したのだが、それは間違いだとしている。同じ司馬遷の『史記』の康叔世家に「武庚の殷の余民を以て康叔を封じて、君となし、河・淇の北、故商の墟に居らしむ」という記述と、前出の『史記』項羽本紀の洹水南という文と結びつけて、殷墟は洹水、淇水及び黄河に囲まれた地にあると結論付けた。この説は独自のものではあるが影響力があり、同調する学者も少なくはない。

積極的に考古学の資料を利用した例は伊藤道治の「殷周時代の都市——考古学から見た都」である。<sup>(88)</sup>当時の考古学の資料を充分に利用して春秋戦国時代までの、考古発掘で発見された都市の遺跡などを検証した。

1970年代以来、城壁（圉壁）のある遺跡が中国の各地で発見され、公表されている。これらの発見をめぐって、初期都市・初期文明・初期国家などの問題とも関連して、研究者たちの大きな関心と注目が集められた。論じる角度及び方法はさまざまであるが、城壁（圉壁）が早い時期から一般的に存在していた事実が確認されたことは、中国の先史時代及び初期歴史時代の諸課題の研究にとって、言うまでもなく非常に重要な出来事だろう。これらの城壁（圉壁）のある遺跡を集中的に研究し、あるいは事例として取り入れて研究した考古学・歴史学・地理学角度からの研究論文は少なくはない。

杉本憲司の「中国古代の城」は歴史時代の城壁（城址）を中心として論述しているが、その「城（壁）」の始まりが新石器時代からだと言明し、半坡、城子崖、鄭州商城、盤竜城、殷墟など新石器時代及び商代の遺跡を取り上げて、自説を展開した。<sup>(89)</sup>

中村慎一は中国の先史時代の圉壁集落をめぐって、数篇の論文を発表している。氏の「中国における圉壁集落の出現」という論文は圉壁集落の定義から着手し、圉壁集落の分布・機

(86) 宮崎市定「中国城郭起源の異説」、『歴史と地理』32巻3号、1933年9月。

(87) 宮崎市定「中国上代の都市国家とその墓地——商邑は何処にあったか」、『東洋史研究』28巻4号、1970年3月。又、「補遺」、『東洋史研究』29巻2・3合併号、1970年12月。

(88) 伊藤道治「殷周時代の都市——考古学から見た都」、『歴史教育』14巻12号、1966年12月。

(89) 杉本憲司「中国古代の城」、上田正昭編『日本古代文化の探求—城』、社会思想社1977年。

(90) 中村慎一「中国における圉壁集落の出現」、『考古学研究』44巻2号、1997年9月。

能を検討し、中国全土を6つの地域に分けて詳しく分析した上で、「都市の要件」・「集落の階層性と政治組織の復原」・「都市出現の契機」という3つの角度から、中国の先史時代の囲壁集落（初期都市の可能性）について全面的に検討した。また氏の「石家河遺跡をめぐる諸問題」は人口的基盤、特殊土製品、玉器という三つの問題（部分）から石家河遺跡を検討している。<sup>(91)</sup>特にこの城壁（囲壁）を建造するため、1000人の労働力で10年間の歳月、あるいは1万人で1年間がかかるという推測により、氏の「都市の要件として5千人程度以上の人口規模を考える」との理論によって、この石家河遺跡は都市である可能性が非常に高いとの説を展開している。氏はさらに「石家河遺跡と中国都市文明の起源」において、<sup>(92)</sup>同遺跡を出発点として、長江流域で屈家嶺文化から石家河文化にかけての時期の大規模な囲壁集落が相次いで発見されていることを取り上げて、集落の規模、集落内の土地の利用状況、そして集落間の関係などの分析を通じて、該当地域における都市と国家の起源についての解釈を提示し、中国の都市文明の起源を検討した。中国の先史時代の囲壁集落及び初期都市に関するいろいろな角度からの研究の中で、中村慎一氏の研究の独特性が表れている。特に氏の城壁を建造するための必要労働力の分析から集落人口を推算する方法、また「都市」判断の三つの基準（五千人程度の人口、非食料生産者の卓越と相互依存的な経済、地縁組織と政治権力の存在）などは非常に特徴的で、参考の価値があると思われる。

後藤健の「山東省における新石器時代の集落——城壁を中心として」は中国山東省内で発見された新石器時代の城壁集落を詳しく取り上げて、<sup>(93)</sup>城址の形態・規模・建造及び使用時期・内部構造・分布などの角度から検討を行った。結論として、墓地から見た階層性の形成過程に関連して、集落間の階層性の形成は大汶口文化の中期から始まり、竜山期には大規模な城址の出現によりこの階層性がより強まったと指摘している。

小川誠の「城牆の出現にかかわる問題」は中国の各地で発見された新石器時代から殷代にかけての城壁を取り上げ、<sup>(94)</sup>城壁の時間的、空間的位置付け及び技術的背景の角度から検討し、城壁の形成過程をさぐったものである。築造技術に力点を入れた検討はこの論文の特徴である。

あるテーマに限定して、中国における研究の現状を紹介する文もしばしば見られる。例えば、五井直弘の「中国古代城堡・都城調査の近況」は研究動向を報告するものであり、<sup>(95)</sup>当時中国での調査・研究の状況はほぼ（全面）網羅している。

飯島武次が訳した北京大学の徐天進の「中国夏商時期都城研究の現状」は、<sup>(96)</sup>夏商時期の殷

(91) 中村慎一「石家河遺跡をめぐる諸問題」、『日本中国考古学会会報』第7号、1997年。

(92) 中村慎一「石家河遺跡と中国都市文明の起源」、藤本強主編『住の考古学』、同成社1997年。

(93) 後藤健「山東省における新石器時代の集落——城壁を中心として」、『史観』（早稲田大学）139期、1998年9月。

(94) 小川誠「城牆の出現にかかわる問題」、『上智史学』31期、1986年11月。

(95) 五井直弘「中国古代城堡・都城調査の近況」、『史潮』新16号、1985年3月。

(96) 徐天進原作、飯島武次訳「中国夏商時期都城研究の現状」、『駒沢史学』44号、1992年9月。

墟・鄭州・二里头・屍鄉溝という四ヶ所の「都城」について、当時の時点での研究現状及び問題点を詳しく紹介している。また江村治樹の「中国古代都市遺跡の現状と問題点」も同類の紹介である<sup>(97)</sup>。飯島武次にはほかに「中国文明起源と中国都市文明」という論文がある<sup>(98)</sup>。

小澤正人が訳した王毅ら四人の「中国長江文明起源研究の新成果——四川成都で発見された先史時代城址群——」<sup>(99)</sup>は、四川省の成都の近くで発見された、先史時代の城壁がある五ヶ所の遺跡の調査・発掘状況を紹介している。注目され始めた長江流域の城址が取り上げられたのではあるが、調査・発掘現場責任者たちの体験談のようなものである。

陳国慶の「黄河流域新石器時代城址浅析」は中国各地で発見された9ヶ所の「城址」を紹介した上で、「城址の起源と発展」についても論じている。<sup>(100)</sup>

高橋誠一の「東アジアの都城遺跡」は中国を含む東アジア地域の都城を網羅した、影響の大きい論文であるが、主に歴史年代の都城を取り上げて、先史城壁についてはほとんど言及していない。<sup>(101)</sup>

五井直弘によって『中国古代の城——中国に古城址を訪ねて』<sup>(102)</sup>が出版されている。作者が歴史年代の幾つかの古城址を訪ねて、その地の歴史背景及び研究現状、また作者の個人感想を書いた本である。年代の古いものでは殷墟が取り上げられており、殷墟研究の流れ及び関係文献も詳しく紹介している。

岸俊男主編のシリーズ「日本都城制の源流を探る」に、『中国の都城遺跡』<sup>(103)</sup>、『中国江南の都城遺跡』<sup>(104)</sup>、『中国山東山西の都城遺跡』<sup>(105)</sup>がある。「江南」及び「山東山西」の二冊に取り上げられている例はすべて歴史年代の遺跡であり、前者の最古の例は南京の前身である「石頭城」で、後者の最古の例は斉国古城の臨徑である。最初に出版された『中国の都城遺跡』では鄭州商城、二里头及び盤竜城が取り上げられている。資料紹介は中心で、編集者の見解も若干述べられている。

藤岡謙二郎主編の『講座考古地理学2 古代都市』は「総論」(藤岡謙二郎)及び第二章第二節の「古代中国の都市」(上田早苗)<sup>(106)</sup>において、鄭州商城を二回取り上げ、また第二節の

---

(97) 江村治樹「中国古代都市遺跡の現状と問題点」、『名古屋大学文学部論集』122号、1995年。

(98) 飯島武次「中国文明起源と中国都市文明」、古代オリエント博物館編『江上先生米寿記念論集 文明学原論』、山川出版社1995年。

(99) 王毅など原作、小澤正人訳「中国長江文明起源研究の新成果——四川成都で発見された先史時代城址群——」、『東方学』95輯、1998年1月。

(100) 陳国慶「黄河流域新石器時代城址浅析」、『西南学院国際文化論集』11巻2号、1997年2月。

(101) 高橋誠一「東アジアの都城遺跡」、『人文地理』42巻5号、1990年。

(102) 五井直弘『中国古代の城——中国に古城址を訪ねて』、研文出版1983年9月。

(103) 岸俊男主編シリーズ「日本都城制の源流を探る」の中、『中国の都城遺跡』、同朋舎1983年。

(104) 同シリーズの中、『中国江南の都城遺跡』、同朋舎1985年。

(105) 同シリーズの中、『中国山東山西の都城遺跡』、同朋舎1988年。

(106) 藤岡謙二郎主編『講座考古地理学2 古代都市』、学生社1983年。

「古代中国の都市」において、殷墟も取り上げた。いずれも中国最古の「都市」であると主張する。

山近久美子の「中国城郭都市の空間的展開」は主に有史年代の城郭の例を取り上げており、<sup>(107)</sup>殷代の二里頭遺跡・分郷溝商城・鄭州商城・盤竜城などにも言及した。論文は城郭集落の立地・内部空間構成・空間概念の変化という三つの角度から説を展開させ、「空間概念の変化」という問題の提起や、また「城壁の有無は国の違いだけでは説明できない面を持つ」とか、「都城についても都城のみで考えるのではなく」との指摘が鋭く、論説に参考の価値があると思われる。

都出比呂志の「世界の城塞的集落と都市」<sup>(108)</sup>は、世界を視野に入れた先史時代の城塞的集落に関する理論的検討である。論文では中国の先史城塞集落の例が多く取り入れられ、城塞（城壁）のある集落から都市への転換の過程、また都市の定義などが中心に、鋭い見解が展開された。

前も言及したように、岡村秀典は中国の各地で調査を行って、中国の城郭集落・囲壁集落また中国の都市文明の起源などの問題について、調査報告及び数多くの論文において見解を述べている。<sup>(109)</sup>「湖北陰湘城遺跡研究」、<sup>(110)</sup>「石家河遺跡と中国都市文明の起源」、<sup>(111)</sup>「長江中流域における城郭集落の形成」、<sup>(112)</sup>「中国における囲壁集落の出現」などはその研究論文の例である。長江中流域の半径約百キロの範囲内に分布する屈家嶺・石家河文化における城郭集落の性格については、氏によれば、城郭集落間には三類型にわたる階層（三種類の集落）が存在して、石家河集落はその頂点にある。発展段階（初期都市であるかどうか）について、氏は都市を「政治や宗教的な権力によって人々が集中し、新しい地縁的な人的結合とその社会に対する支配が成立しているもの」と定義したうえで、石家河遺跡群ではそれまでの血縁とは異なっており、地縁的な族集団の成立が芽生え、都市への第一歩を踏み出しはいたが、階層化が十分に進展しなかったため、強権による支配秩序が確立していない段階であるとした。さらに階層的に下位に位置する集落は独立性が高く、上位の集落との間の格差も大きくはないため、この段階を「国家」とすることはできず、国家以前の酋邦―首長制という社会の段階であるとした。

最近の動きだが、1999年12月3日から4日にかけて、京都大学人文科学研究所創立70周年を記念する活動の一環として、京都大学で『中国古代都市の形成』をテーマとする国際学術

---

(107) 山近久美子「中国城郭都市の空間的展開」、『防衛大学校紀要』第76輯、1998年3月。

(108) 都出比呂志「世界の城塞的集落と都市」、『福岡からアジアへ3 環濠集落の源流を探る』、西日本新聞社1995年11月。

(109) 岡村秀典・張緒球「湖北陰湘城遺跡研究」、『東方学報』京都69号、1997年。

(110) 岡村秀典「石家河遺跡と中国都市文明の起源」、藤本強主編『住の考古学』、同成社1997年。

(111) 岡村秀典「長江中流域における城郭集落の形成」、『日本中国考古学会会報』7号、1997年。

(112) 岡村秀典「中国における囲壁集落の出現」、『考古学研究』44巻2号、1997年



シンポジウムが行われた。シンポジウムは人文科学研究所の主催で、中国河南省から4人の学者が参加し、それぞれ「鄭州西山仰韶時代城址と中国文明の形成」(張玉石)、「輝県孟莊二里頭時代城址の研究」(袁広闊)、「原城考弁」(楊貴金)と「鄭州商城の発見と研究」(楊育彬)との研究報告を発表した。翌日、焦作府城の商代城址の発掘と調査結果が報告され、集中的に論議された。このほかに、中国の古代都市というテーマをめぐって総合的な討議もなされた。中国の古代都市から世界の古代都市論の再構築を目指す岡村秀典は「中国古代都市研究の現状」と題する発言を行った。学史的整理から自らが関わった府城遺跡の発掘にいたる過程とその意義を示した。シンポジウムは中国の古代都市の形成を題とするが、主に夏と商時期における城壁のある幾つかの遺跡を中心として論議が行われ、都市の起源や都市の定義などの理論問題については、論議されなかった。今回のシンポジウムの論議は岡村秀典の『中国古代都市の形成 (平成9－11年科学研究費報告書)』にまとめられている。

以上は中国の先史集落及び初期都市に関する研究の発展についての簡単なまとめである。具体的な検討は、別の論文において展開していきたいと思う。